

京都府埋蔵文化財情報

第127号

平成26年度京都府内の埋蔵文化財調査-----	細川康晴---	1
共同研究 古代における「繊維製品」の研究 —京都府木津川市上粕北遺跡出土の漆布状製品の検討— -----	松尾史子・伊賀高弘---	9
平成26年度発掘調査略報-----		19
12. 平等院旧境内遺跡		
13. 下水主遺跡第6次(D3地区)・水主神社東遺跡第6次(B4地区)		
長岡京跡調査だより・123-----		23
普及啓発事業(平成27年3月～6月)-----		25
公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター設立35周年記念事業について-----		27
平成27年度のセンター組織と動向-----		30

2015年8月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

平成 26 年度京都府内の埋蔵文化財調査

細川康晴

平成26年度に当調査研究センターでは、城陽市下水主遺跡、京田辺市松井横穴群などの新名神高速道路関係遺跡の発掘調査を継続して行ったほか、北部では舞鶴市で河川築堤事業に伴う大川遺跡の発掘調査などの大規模な発掘調査を行った。

以下に府内の主な発掘調査の状況について、府内の市町村教育委員会等、他の調査機関による発掘調査を含め、地域ごとに概観したい。

なお、中丹地域では舞鶴市、南丹地域では亀岡市、乙訓地域では向日市、長岡京市、大山崎町、南山城地域では宇治市、城陽市、京田辺市、木津川市、精華町の調査成果を取り上げ、文末に各調査組織を記した。

〈中丹地域〉

北近畿最大の河川である日本海に注ぐ由良川流域を中心とした地域で、平野部の少ない河口部では、縄文時代から近世の集落遺跡の分布が多く知られている。

舞鶴市^{おおかわ}大川遺跡第5次調査は、平成24年度から継続して実施している由良川の築堤工事に伴う発掘調査で、弥生時代中期の方形周溝墓、弥生時代後期、古墳時代前期から後期の竪穴建物、飛鳥時代の掘立柱建物、平安時代後期の炉、掘立柱建物等からなる鍛冶工房跡などを検出し、由良



写真1 大川遺跡B3地区全景(北東から)

川の自然堤防上に立地する集落遺跡の一つとして新たな調査事例を加えた(当センター)。

〈南丹地域〉

平安京に隣接し、畿内と呼ばれる近畿地方中枢部と丹波・丹後地域から日本海側を結ぶ山陰道の入り口に位置する地域である。

亀岡市^{いずも}出雲遺跡第19次調査・^{なかにふんぐん}中古墳群第3次調査では、出雲遺跡で平安時代後期から鎌倉時代前期の溝や柱列、土坑などを検出した。中古墳群では4基の古墳を調査し、1号墳では、古墳時代中期の1辺25m以上の方墳墳丘裾部の葺石と周溝が見つかり、円筒埴輪や須恵器が出土した。ほかに平安時代から鎌倉時代の中国製の白磁、青磁なども見つかった。亀岡・園部盆地の古墳時代中期の首長墓は同地域内には前方後円墳がみられず、方墳を頂点としている。近年、盆地内の平野部では、このような中小規模の埋没した方墳の発見事例が相次ぎ、当該地域の古墳時代中期の階層構造を復元する上で欠かせない資料となっている(当センター)。

亀岡市^{いずも}出雲遺跡第18次調査では、古墳時代中期の竪穴建物や平安時代から中世の柱穴などを検出し、土師器などが出土した。丹波国一宮である出雲大神宮に近接する集落遺跡の具体相を明らかにする上で貴重な成果である(当センター)。

亀岡市^{しのようぎょうせいさん}篠窯業生産遺跡群では、西山1号窯として周知された地区が調査され、10世紀末から11世紀初頭にあたる平安時代中期の瓦陶兼業窯が2基検出された。先行する三角窯では主に須恵



写真2 中1号墳東周溝(南東から)

器や緑釉陶器が焼成され、後続する楕円形窯では主に瓦が焼成されていた(大阪大学考古学研究室)。

〈京都市域〉

千年の都平安京を中心とした地域で、山城盆地北半部にあたり、京の内外では、平安京遷都以前の集落や古墳等が分布する。また、平安京内においては近世までの都市遺跡に関連する調査事例が多い。

てらまちきゅういき ほうじょうじ
寺町旧域・法成寺跡では、鴨沂高校校舎の改築に伴い発掘調査を継続して行っている。

調査地は豊臣秀吉が天正年間(1573～1593年)に京の街中にあった寺院を移転させて形成した寺町の範囲内に位置し、「洛中絵図」(1637年)では革堂(行願寺)、専念寺、常念寺などにあたる。また、宝永の大火で焼失した寺院の跡とみられる礎石建物などを検出し、瓦などが出土した。法成寺に使用されたと考えられる緑釉瓦もわずかに出土したが、法成寺跡に関連する遺構は検出できず、鴨川の河川堆積層による礫層を検出し、平安時代の瓦や室町時代の土師器が出土した(当センター)。

へいあんきょう ひがしほんがんにまえこぼく
平安京跡・東本願寺前古墓群は、平安京左京八条三坊九町にあたり、鎌倉時代後半から室町時代の土坑、溝などを検出した。特に土坑は大小180基以上を検出したが、70基以上の土坑からは多量の土師器が出土した。敷地内の空閑地では大量の土師器を用いた儀礼が行われたものとも考えられるが、一部の土坑からは鉄釘、銭貨、骨片が出土しているものもあるので、宅地内に造られた墓が含まれている可能性も考えられる(当センター)。

へいあんきょうちようどういんえんろくどう
平安宮朝堂院延祿堂は朝堂12堂の一つであり、最大の建物である。西端を示す基壇を構成し

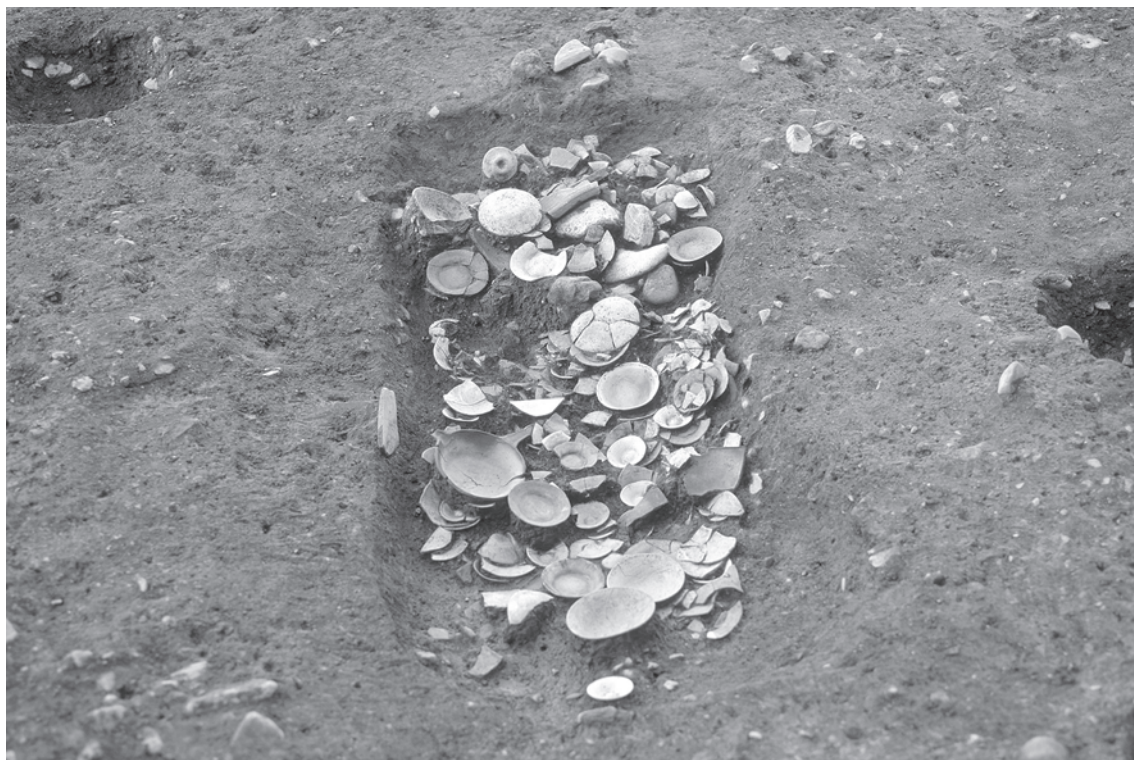


写真3 平安京跡・東本願寺前古墓群 土坑検出状況(南から)

ていた凝灰岩の抜き取り溝が確認された。これにより、延祿堂の基壇の規模は南北約62m (20.7丈)、東西約17.56m (5.9丈)であることがわかった。また、基壇盛土や階段跡などが見つかかり、平安時代の軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、鴟尾、丸瓦、平瓦、緑釉瓦などが出土した(京都市文化財保護課)。

^{しば}芝古墳(芝1号墳)は古墳時代後期の前方後円墳で、範囲確認調査が行われ、墳丘長約33mであることが確定した。円筒埴輪や朝顔形埴輪が存在することが判明し、築造時期が古墳時代後期初頭(6世紀初頭)であることがわかった。周溝は確認されたが、葺石は施されておらず、排水溝とみられる石組み遺構も確認されている。近接する同様の規模の前方後円墳である長岡京市井ノ内車塚古墳や井ノ内稲荷塚古墳を含め、葺石、埴輪を備え、横穴式石室内に二上山白色凝灰岩製の組合式家形石棺が安置される向日市物集女車塚古墳を頂点とする乙訓地域(桂川右岸)の古墳時代後期の首長墓の関係性を検討する上で、重要な調査成果が加わった(京都市文化財保護課)。

^{やましなほんがんじ}山科本願寺跡第21次調査では、保存目的の調査が行われ、堀や溝を埋めて建物が建てられたことが明らかとなった。土地の改修は3段階にわたって行われ、まず幅2.8m、深さ1.6mの南北の堀が埋められ、その後に幅3mの東西の堀、最後に土塁に沿った南北の排水溝が埋められている。土塁と濠で囲まれた城塞都市山科本願寺の中心部である御本寺が時代とともに変化していく様相が明らかにされた(京都市文化財保護課)。

^{はづかしひしかわじょう}羽束師菱川城跡では、安土桃山時代から江戸時代初期の真鍮の柄の小刀が出土した(京都市文化財保護課)。

重要文化財^{きよみずでらとどろきもん}清水寺轟門の解体修理に伴う発掘調査では、15世紀以降のものとみられる礎石などが見つかった。1633(寛永10)年に現在の門が再建される前に消失した門の礎石とみられる。15世紀以降同じ場所で火災などによる焼失のため3回建て替えられたことも分かった(京都府文化財保護課)。

^{へいあんきょう}平安京左京九条二坊十六町跡・^{おどい}御土居跡では、平安時代後期から鎌倉時代前期の建物の地業跡と柱穴が見つかり、末法思想の影響を強く受けて建てられた貴族邸宅の阿弥陀仏を安置する持仏堂とみられる。持仏堂の遺構は南北9.2m、東西8.3mのほぼ正方形で、平安京内では2例目となる。また御土居の堀跡も検出された(京都市埋蔵文化財研究所)。

また、六勝寺の一つである^{えんしょうじ}円勝寺の西端で円勝寺と成勝寺を区画する長さ37m、幅3.6mの南北方向の溝跡も確認された。円勝寺の東西は約120mと判明した。ほかに平安京の二条大路につながる白川街区を東西に走る二条大路末の南限を示す築地堀跡も確認され、二条大路末の幅が約30mであることもわかった(京都市埋蔵文化財研究所)。

^{ながおきょう}長岡京左京第571次左京三条三坊十町跡・^{かいできよみず}鶏冠井清水遺跡では、想定どおりに幅約1mの東三坊坊間東小路の西側溝が確認され、人形、和同開珎が出土した(京都市埋蔵文化財研究所)。

長岡京左京第572次左京二条四坊五・十二町跡、東四坊坊間小路、東四坊坊間東小路では、長岡京期の南北溝が検出された(京都市埋蔵文化財研究所)。

長岡京右京第1100次右京北辺八町跡・^{かみさときたのちょう}上里北ノ町遺跡では、古墳時代前期から中期の葺石と埴輪を伴う古墳が新たに発見された(京都市埋蔵文化財研究所)。

吉田町^{よしだにほんまつちょう}吉田二本松町遺跡では、弥生時代前期後葉の水田の跡、流路、当時の地形が非常に良好な状態で検出された。水田は小区画水田で平均10㎡程度の小さな短冊状に区画したものである。弥生時代前期の水田遺構は府内では2例目となる(京都大学文化財総合研究センター)。

二条家^{にじょうけい}邸跡では、江戸時代中期の邸宅跡から乾山焼の陶器片が見つかったほか、江戸時代前期に小石を敷き詰めた道路の遺構も見つかった(同志社大学歴史資料館)。

六勝寺の一つである^{そんしょうじ}尊勝寺跡では平安時代末の阿弥陀堂の南側の柱跡が見つかり南端が確認された。現存する浄瑠璃寺の阿弥陀堂の約4倍の広さとなり、九体阿弥陀堂としては最大級の規模であることがわかった(イビソク関西支店)。

平安^{へいあんきょう}京跡(下京区河原町通四条下ル)では室町時代の備前焼の壺が出土し、中には約4万枚の古銭が入っていた(イビソク関西支店)。

大雲院^{だいうんいん}跡では、豊臣秀次の供養塔である五輪塔の基礎の一部が発見された(イビソク関西支店)。

〈乙訓地域〉

桂川右岸地域を中心とし、山城盆地北半部にあたる。長岡京以前の集落や古墳も多く知られる。

向日市^{いつかはら}五塚原古墳第6次調査では、3世紀半ばから後半にあたる古墳時代前期の全長91.2mの前方後円墳で、前方部はばち形となり、箸墓古墳と共通する斜路状平坦面が検出され、あらためて箸墓古墳と設計が共通する相似形墳であることが確認された。五塚原古墳では埴輪を持たないなど、箸墓古墳との相違点もあるが、乙訓地域で最古の前方後円墳として、その築造契機において初期ヤマト王権の中核であった大和盆地東南部の勢力ときわめて強い親縁性を持つことが、具体的な古墳の設計規格と築造法の共通性により補強された意義は大きい(向日市埋蔵文化財センター・立命館大学)。

向日市^{なかかいどう}中海道遺跡第69次調査では古墳時代初頭の井戸状遺構、溝などを検出し、土師器、埴輪などが出土した(向日市埋蔵文化財センター)。

向日市長岡宮跡^{ながおかきゅう}第502次^{きたきょうこく}北京極大路(小路)では、都造りの過程で設けられた排水用の溝とも考えられる長岡京期の東西溝などが検出され、土師器、須恵器、瓦などが出土した(向日市埋蔵文化財センター)。

向日市長岡宮跡^{ちようどういんほくとうかんが}第505次^{もりもと}朝堂院北東官衙、一条大路、森本遺跡では、長岡京期の溝、柱穴、土坑、弥生時代の溝などが検出された(向日市埋蔵文化財センター)。

向日市長岡京跡左京第570次左京二条三坊六町^{かいで}・鶏冠井遺跡では、長岡京期の溝群が検出され、宅地利用の一端が明らかとなったほか、遺物包含層から縄文土器も出土している(向日市埋蔵文化財センター)。

向日市長岡京跡左京第574次三条条間北小路、左京三条三坊二町^{かいできよみず}・鶏冠井清水遺跡では、長岡京期の三条条間北小路の南北側溝が確認され、土師器、須恵器、鬼瓦、平・丸瓦、石製品(白石)、木製品などが出土した(向日市埋蔵文化財センター)。

向日市長岡京跡左京第575次左京四条二坊四町・五町、東二坊坊間西小路では、平安時代から

中世の柱穴、土坑、井戸、東西溝などが検出され、土師器、須恵器、緑釉陶器、黒色土器、瓦器などが出土した(向日市埋蔵文化財センター)。

向日市長岡京跡左京第577次左京一条三坊七町、一条条間小路両側溝・東三坊坊間西小路東側溝、^{たかだ}高田遺跡では、長岡京期の一条条間南小路南北側溝・東三坊坊間西小路東側溝、南北柵列などが検出され、ほぼ推定位置で条坊交差点が確認された(向日市埋蔵文化財センター)。

長岡京市^{いのうちくるまつか}井ノ内車塚古墳は、古墳時代後期の全長39mの前方後円墳である。第7次調査では、西側くびれ部で造り出しが確認され、円筒・朝顔形・家形埴輪や須恵器などが出土した(長岡京市埋蔵文化財センター)。

長岡京市長岡京跡右京第1082次・^{こうたり}神足遺跡・^{きんせいしやうりゆうじじやう}近世勝龍寺城跡では、中世から近世の土坑、柱穴が検出され、中世末から近世初頭の丸瓦、軒丸瓦がまとまって出土した。近世勝龍寺城との関連が考えられている。朱雀大路に係わる遺構、遺物は確認できなかった(長岡京市埋蔵文化財センター)。

長岡京市長岡京跡右京第1083次右京九条二坊八町・^{ほざま}砦遺跡では中世の溝、土坑などが検出された。ほかにチャート製石鏃、サヌカイト剥片が出土している(長岡京市埋蔵文化財センター)。

長岡京市長岡京跡右京第1084次・^{しやうりゆうじじやう}勝龍寺城跡では、勝龍寺城以前の中世の神足城の一部とみられる幅3.8m、深さ1.5mの空堀と土塁が検出され、神足城は土塁と堀に囲まれた1辺約50mの方形の居館であることが明らかとなった(長岡京市埋蔵文化財センター)。

長岡京市長岡京跡右京第1086次・1087次右京六条二坊三町・^{かいてん}開田遺跡では、長岡京期の柱穴、蒸籠組の井戸などが検出され、土師器、須恵器、平・丸瓦、凝灰岩片、曲物底板、櫛、刀子形木製品などが出土した(長岡京市埋蔵文化財センター)。

長岡京市長岡京跡右京第1091次右京三条二坊九町では、長岡京の二条大路南側溝を確認した(長岡京市埋蔵文化財センター)。

長岡京市長岡京跡右京第1096次右京五条四坊八町、^{ちやうほうじ}長法寺遺跡では、弥生時代後期の合わせ口式甕棺や古墳時代の円筒埴輪棺が検出された(長岡京市埋蔵文化財センター)。

長岡京市長岡京跡右京第1104次右京六条一坊十町、^{こうたり}神足遺跡、^{しやうりゆうじじやう}勝龍寺城跡では、江戸時代の勝龍寺城跡に関する柵列、溝などが検出されたほか、古墳時代後期の古墳の周溝が検出され、開田古墳群に関連するとみられる複数の方墳が存在していることが明らかとなった(長岡京市埋蔵文化財センター)。

長岡京市長岡京跡右京第1106次右京八条三坊八町、^{ともおか}友岡遺跡では、長岡京期の掘立柱建物、溝、土坑、中世の土坑、井戸などが検出された(長岡京市埋蔵文化財センター)。

長岡京市長岡京跡右京第1108次右京三条三坊十町、^{いまざと}今里遺跡では長岡京期の柱掘形や古墳時代後期の溝、土坑、竪穴建物などが検出された(長岡京市埋蔵文化財センター)。

大山崎町^{おおやまざきがよう}史跡大山崎瓦窯跡では、平安時代の大山崎瓦窯に伴う瓦廃棄土坑が検出され、出土した瓦の中には平安京の最初期の瓦の生産を担った京都市北区に所在する西賀茂瓦窯出土の瓦と同じ瓦範が用いられていることが明らかとなった。また大山崎瓦窯成立以前の山崎廢寺(山崎院)に

関わるとみられる奈良時代の柱列も確認された(大山崎町教育委員会)。

〈南山城地域〉

山城盆地南半部にあたり、宇治川、木津川流域を中心とした地域で、奈良時代の都城として恭仁宮が所在し、宇治市には平等院をはじめとする平安時代の藤原氏関連遺跡が集中して分布している。

京田辺市^{まついおうけつ}松井横穴群では平成23年度から継続して発掘調査を行ってきたが、今年度は古墳時代後期の35基の横穴の調査を行い、総数70基の横穴の調査を終えた。横穴墓の平面形は笏状ないし杓文字状のものが多くみられるが、玄門部の両袖部に袖部を造りだすものもみられる。木棺が用いられたものもあるが、そのうち鉄釘が用いられたものはわずかである。陶棺の出土が1例のみあるが、小型品である。南山城地域では横穴式石室墳からなる群集墳が少なく、横穴墓と石室墳の分布の違いの意味など南山城地域の古墳時代後期の墓制を考える上で重要な調査成果となる(当センター)。

城陽市^{しもみずし}下水主遺跡第6次調査では、平成24年度から継続して実施している新名神高速道路の建設に伴う発掘調査で、古墳時代前期の大規模な溝や、13世紀以降の島畑を確認し、縄文時代晩期の氾濫流路から土器などが出土した。古墳時代前期の大規模な溝は、幅10～11m、深さ約2mを測り、検出長は33mである。弥生時代中期の自然流路が埋没した後、掘り直したもので、おおむね東南東から西北西に向かって流れる。溝の南側では丸太材を積み上げた大規模な護岸を確認した。また、部分的に敷葉工法を用いていたことも確認している。

なお、これまで検出した島畑は今回検出した27基を加え80基をこえているが、多くは近世以降



写真4 松井横穴群 作業状況(東から)



写真5 下水主遺跡 溝1(西から)

の水田配置に踏襲されていることが明らかとなった(当センター)。

宇治市^{びょうどういんきゅうけいだい}平等院旧境内遺跡は河川改修事業に伴い平成24年度から継続して発掘調査を行っている。川底から近世以降まで使われた可能性がある南北約53m×東西約5mの範囲に人頭大の石を埋め込んで土を盛り上げて造られた堤状の護岸遺構が見つかり、江戸時代の陶磁器などが出土した。ほかに平等院の修復で廃棄された平安時代から江戸時代の瓦片も出土した(当センター)。

精華町^{いぬいだに}乾谷遺跡・^{いぬいだにおくずれ}乾谷大崩遺跡では、いずれも初めて発掘調査が行われ、江戸時代の水田面等が検出され、鎌倉時代後半から江戸時代の土器や下駄などが出土した(当センター)。

木津川市^{くにきゅう}恭仁宮跡では、前年度検出された朝堂建物が2棟である可能性が高くなり、東西に長い建物であることがわかった。また、朝堂院南門は板葺きで簡素な構造であることがわかった(京都府文化財保護課)。

京田辺市^{こうど}興戸遺跡第18次調査では、葺石、埴輪、周濠を備える古墳時代中期後半の一辺約30mの方墳が見つかり、周濠などから円筒埴輪、形象埴輪が出土した。この古墳は平安時代後期ごろには削られたと考えられる。周辺の丘陵上には古墳時代前期の古墳を含む興戸古墳群が知られ、当該地域の古墳時代の歴史を復元する上で新資料が加わった(京田辺市教育委員会)。

(ほそかわ・やすはる = 当調査研究センター調査課課長補佐)

共同研究

古代における「繊維製品」の研究

— 京都府木津川市上狛北遺跡出土の漆布状製品の検討 —

松尾史子・伊賀高弘

1. はじめに

平成25年度から標題のテーマによる共同研究を実施し、初年度にあたる平成25年度は、類例資料が出土している福岡県太宰府市宮ノ本遺跡の出土資料の実見観察を実施した。

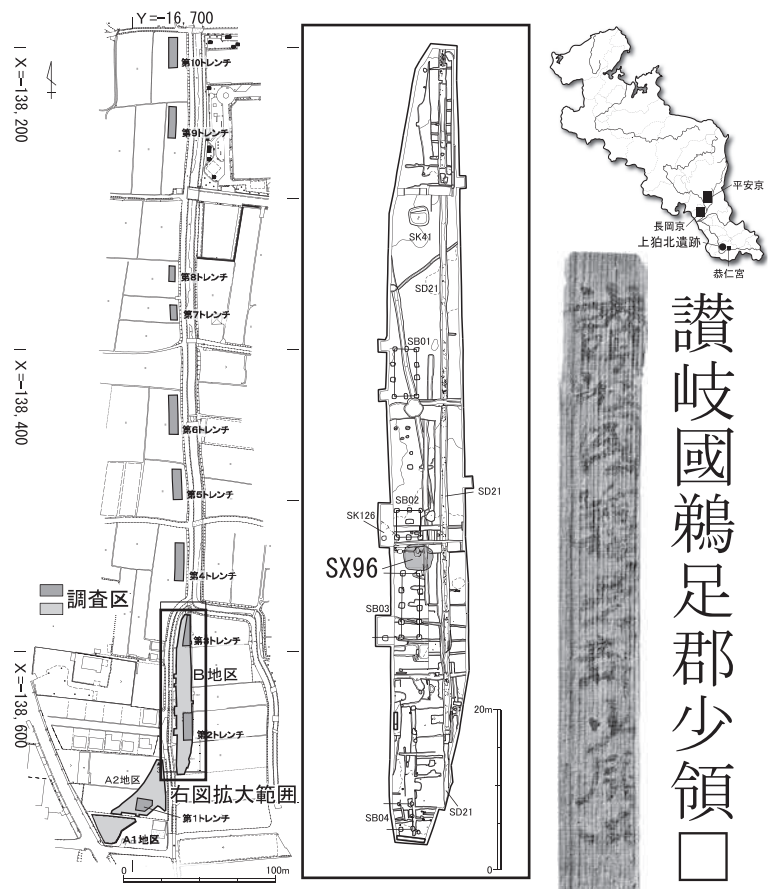
2年度目にあたる平成26年度は、京都府木津川市に所在する上狛北遺跡出土資料について公益財団法人元興寺文化財研究所に分析を依頼し、その成果を得るとともに、当調査研究センター調査の上狛北遺跡出土の漆塗り製品および同市西山古墓出土の漆紗冠の観察所見を加え、総合的な検討を実施した。以下、本件に係る共同研究の成果を総括して報告する。

平成23年度に調査を実施した京都府木津川市上狛北遺跡において、恭仁宮の造営とほぼ同時期の土坑から、多量の土器や炭化物に混じり、「漆塗り製品」が出土した。

湿潤で空気に触れない密閉されたシルト層にパックされて



第1図 調査地位置図(上狛北遺跡)



第2図 上狛北遺跡調査区及び遺構配置図・出土木簡写真

いたことから、その遺存状況は極めて良好であり、共伴資料から帰属時期が確定できる繊維製品の出土例としては、極めて貴重な資料と評価できる。

本資料が出土した土坑S X 96は、恭仁宮が機能した時期の廃棄土坑と考えられ、「讃岐國鶴足郡少領□」「海戸主海人目戸服部姉虫女米五斗」木簡をはじめ、21点の「代」墨書土器を含む土器類・瓦類が出土する特異な遺構である。

本資料が有する脆弱性から調査年度中の諸作業については慎重に進めたが、報告書執筆時点で、十分な分析が果たせなかった。このため、共同研究事業において、この「繊維製品」の詳細な検討を試行し、その細部の構造等について考察を加えることとした。

2. 漆塗り製品の出土状況

漆塗り製品の性格を考察する前に、この遺物が出土した土坑S X 96の構造およびその性格について、言及しておこう。詳細については、当調査研究センター刊行の『京都府遺跡調査報告集』第150冊を参照されたい。

土坑S X 96は、検出面において、一辺3.5～3.9mの方形プランで、検出面から深さ1.9mを測る。土坑の横断面形は平坦な底部から四壁が直線的に立ち上がる逆台形状を呈する。

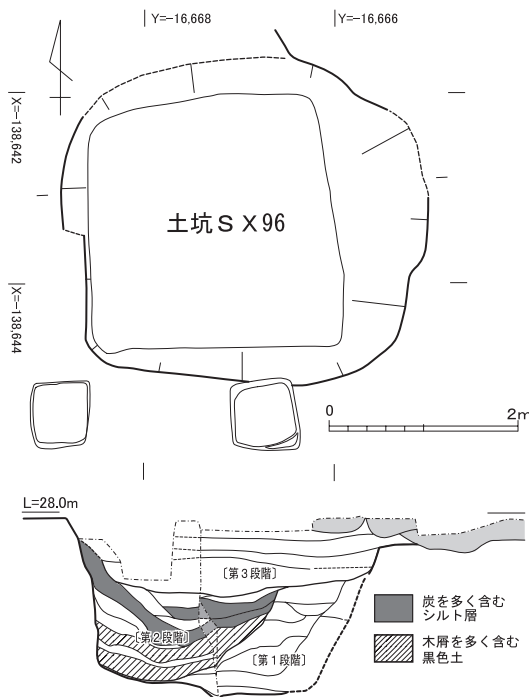
土坑内埋土の堆積状況を観察すると、自然堆積に由来する「レンズ状」の堆積を基本とし、大きく3段階のプロセスを観察することが可能である。第1段階で土坑底から約1mの深さまで堆積した後、何らかの必要に応じて土坑の西寄りの位置で再掘削された形跡が認められ(平面規模は1辺2m前後に縮小)、これも薄縞状の自然の埋没過程を経て、徐々に埋まっていく様子を読み取ることができる(第2段階)。現状で把握できる埋没の最終過程(第3段階)は、土坑がくぼ地

状になり、更なる土地利用の際に人為的に埋め戻すという整地工程により平坦に均されたものと推定する。

土坑S X 96内から出土した遺物は、そのほとんどが上記堆積過程の第2段階の埋積土に包含されていた。

最下層の黄色系の砂質土と薄い間層を挟んでその直上に堆積する黒色土層には、多量の有機物(木屑)が含まれ、人為的な加工痕跡をもつ木製品(定規・曲物など)や木簡3点とその削屑41点が若干の土器や瓦磚類を伴うとともに、良好な状態で出土した。

その上位には、炭化物を多量に含む炭層が複数次にわたりレンズ状に堆積し、焼けた木材や自然木とともに、多量の土器資料と瓦磚類に混じり、



第3図 上狛北遺跡土坑S X 96実測図

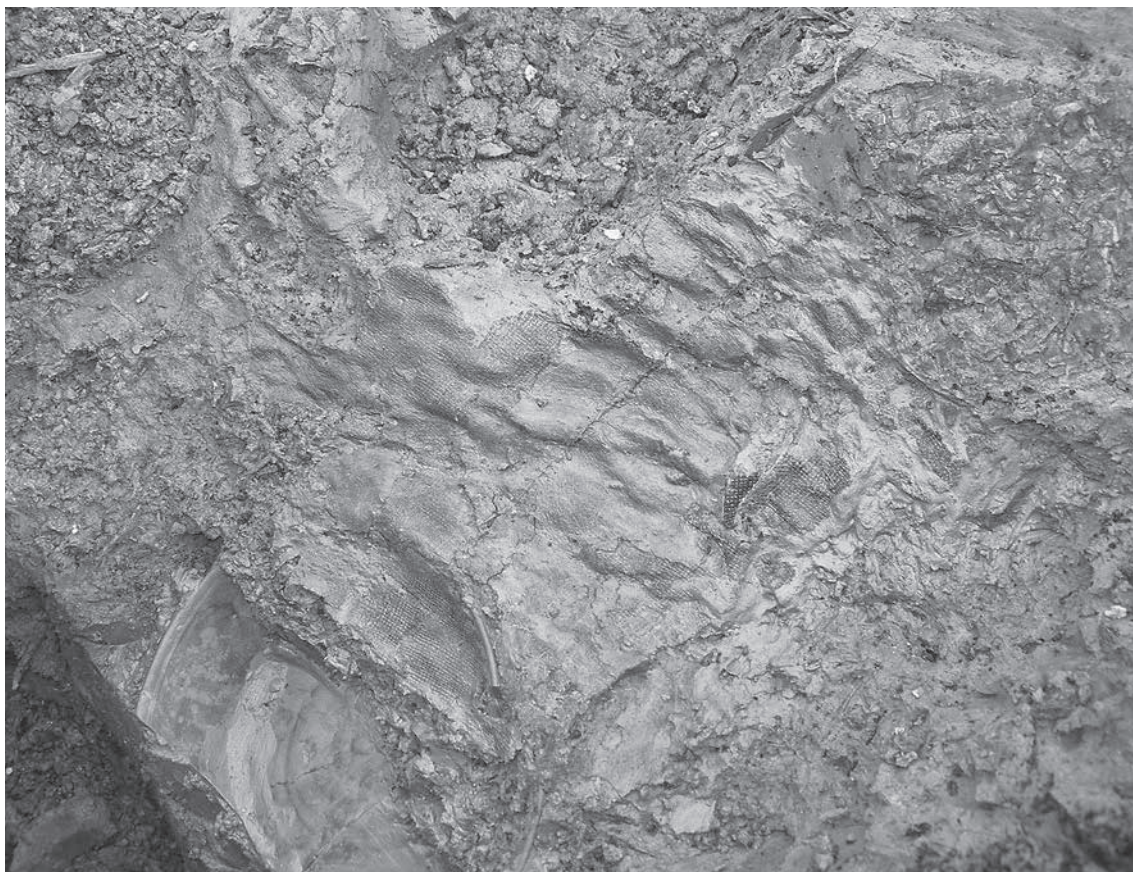


写真1 上粕北遺跡土坑S X96 漆塗り製品出土状況

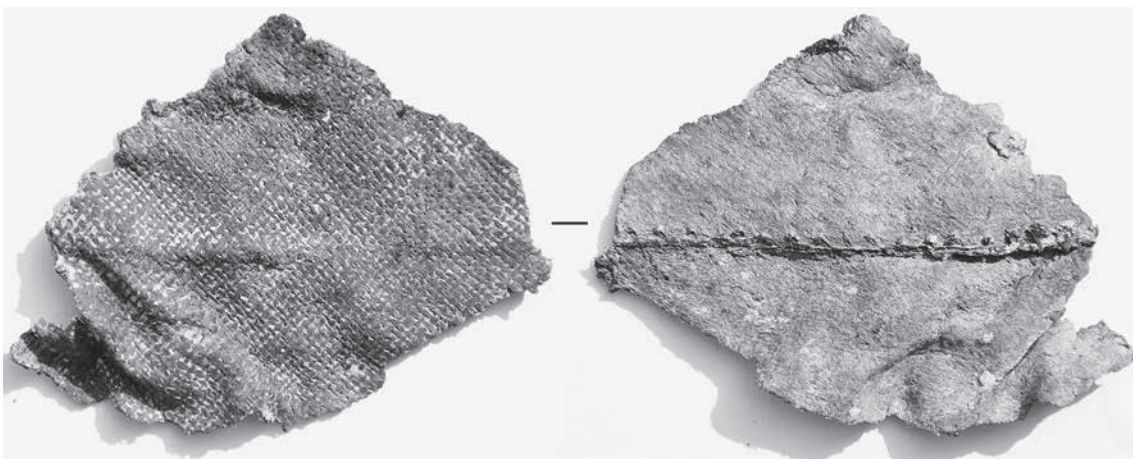


写真2 漆塗り製品縫合部分の表裏(同一資料の合成写真)

銅椀や鉞滓、スサ入りの土壁塊といった特殊な遺物が出土した。土器類は須恵器・土師器・製塩土器で、墨書土器も31点含まれる。緊結具として鉄釘が1点出土している。

多量の土器類や瓦磚類の形式学的年代観は、平城宮式第Ⅲ段階古段階の枠に納まるもので、歴年代的には天平年間的前半740年前後、すなわち恭仁京造営時期と重なる時期の土器資料とみなすことが可能である。

本論の主題となる繊維製品は「漆塗り製品」として、「皮などに織物を漆で固定したような構造」を示す製品が「折り重なったような状態で出土」したと、その出土状況について写真を提示し報



写真3 上狛北遺跡出土漆布(黒色布表面)

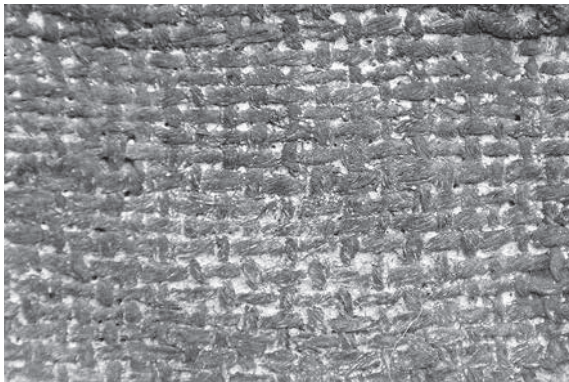


写真4 上狛北遺跡出土黒色布表面細部の状況1



写真5 上狛北遺跡出土黒色布表面細部の状況2

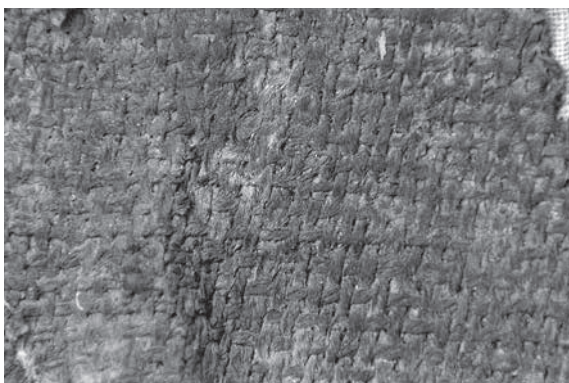


写真6 上狛北遺跡出土黒色布表面細部の状況3
(経緯がやや斜行する部位)

告している(写真1)。出土量はコンテナにして4箱相当を計量する。近年、同種の遺物の出土事例が増え、「漆布」の呼称が与えられており、布の表面に掛けられた物質が漆であるかどうかは、理化学的分析を待って判断すべきであるが、本考でもこれを援用する。

3. 「漆布」の観察

資料の詳細な観察を実施するにあたり、素材を破壊することなく、その細部の写真記録をとるとともに、一部のサンプルを公益財団法人元興寺文化財研究所に理化学的分析業務を委託し、この繊維状製品の構造的な検討を深めた。

理化学的分析では、実体顕微鏡により繊維面を拡大して詳細な観察を実施し、表面の繊維の織りの構造、繊維の撚りの方法などの実見観察では得られない情報(写真7～10・13・14・17～20)を得た。

観察所見の要旨を、写真を例示して以下に説明する。

出土時には、膜状の有機質素材が漆の塗膜により、その形状を維持している脆弱な状況を想定し、素材の破損や破壊を考慮して、現地では製品そのものを単体で取りあげることは避け、遺物を包含していた土(シルト)ごと切り取って持ち帰り、整理作業の工程で、丁寧に洗浄して、「漆布」を抽出した。

埋蔵環境の変化により、土壌の収縮に起因するとみられる遺物の破断が発生し、得られた資料は、大きくて最大長さ60cm程度の破片に分かれていた。

こうした資料を総覧すると、片面に黒色を呈する物質が塗布された織物繊維の構造が明瞭に残り(これを「表面」と仮に呼称する)、その反対側の面は織りの組織が不明瞭で獣皮を思わせ

る褐色の素材が観察された(「裏面」)。

肉眼観察でも容易に判明したが、表裏の組織の違いは、異なる繊維素材を合わせて製作された資料であることを示すものと考えられる。

表面の黒色を呈する布(以下、「黒色布」と記す)は、平織りの組織が肉眼でも明瞭に解読でき、繊維の細かさにより、1 cmあたり8~9×6~7本を計測する個体と、織りの単位が粗い個体が認められた。後者は量的には少ない。

以下、この2種類の漆布について、観察所見を紹介する。

(1)織りの単位の細かい漆布 織りに使用された「糸」は、非常に細い繊維組織が撚られた状況を観察することができ、動物繊維(絹)と考えられる(写真7・8・10)。

経糸(たていと)と緯糸(よこいと)は、同じ太さの撚糸を用い、両者を1本ごとに交互に浮き沈みさせた平織り構造を示す。

写真4のように、その交差角は、直角を基本とするが、布が折れ曲がる部位を中心に交角が傾く部位も観察できる(写真5・6)。

表面の平織りの黒色布は、みかけの外観は漆黒色を呈するが、別組織の裏面布が剥離した部位を観察すると、表裏の布が接する面の平織り組織は茶褐色を呈し、糸素材そのものが黒色で染色されたものでないことがわかる(写真11)。

このため、2枚の布ははり合わせる以前の段階で、表面の布の一側面に黒漆などが塗布されたものと推察できる。

黒色染料は、糸素材までしみ込んでいないので、布形状を為した後に、その片面=表面にのみ塗布されたものと考えられる。

黒色染料の成分および塗布過程に関しては、包埋による顕微鏡下での断面観察を実施していないため、不明と言わざるを得ないが、布素材

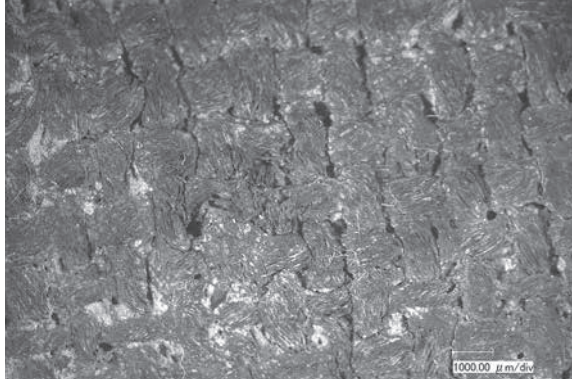


写真7 上粕北遺跡出土漆布(黒色布)表面細部の状況(布剥離部分・実体顕微鏡写真)

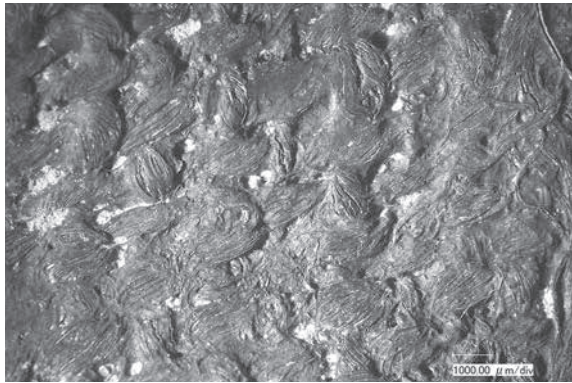


写真8 上粕北遺跡出土漆布(黒色布)表面細部の状況(実体顕微鏡写真)

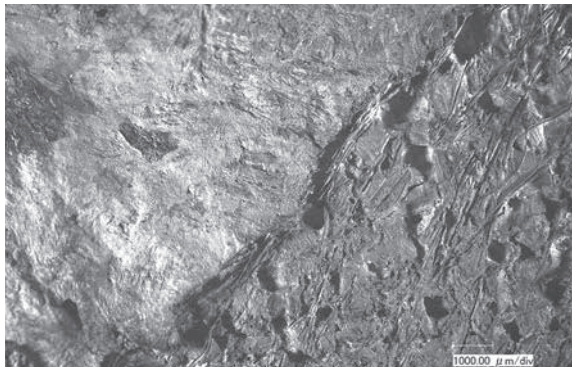


写真9 上粕北遺跡出土漆布表面細部の状況(黒色布が剥離した部位・実体顕微鏡写真)

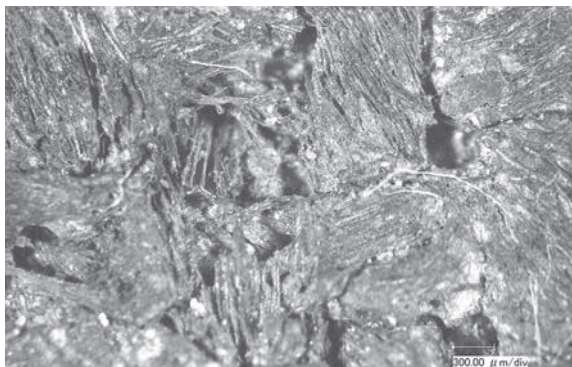


写真10 上粕北遺跡出土漆布表面細部の状況(絹糸の撚り・実体顕微鏡写真)



写真11 上狛北遺跡出土漆布表面細部の状況
(褐色布の背面にのこされた黒色布)

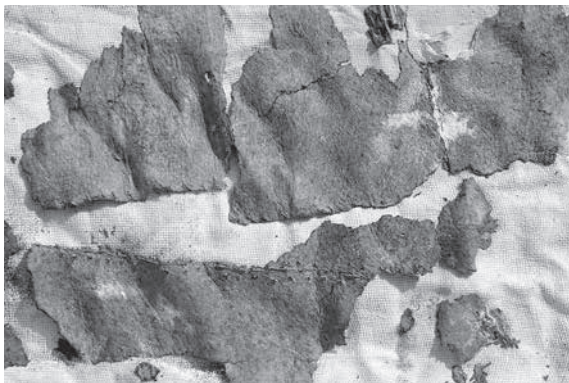


写真12 上狛北遺跡出土漆布裏面(褐色布の表面)

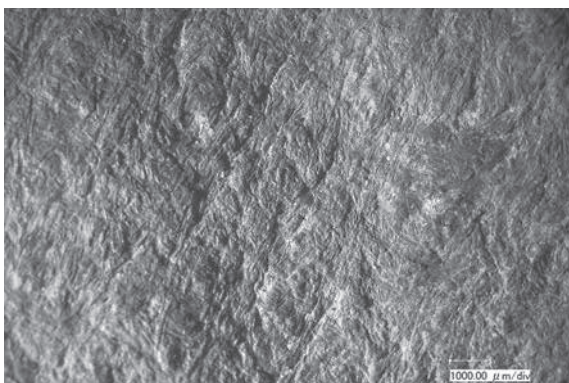


写真13 上狛北遺跡出土漆布裏面細部の状況
(褐色布の繊維構造・実体顕微鏡写真)

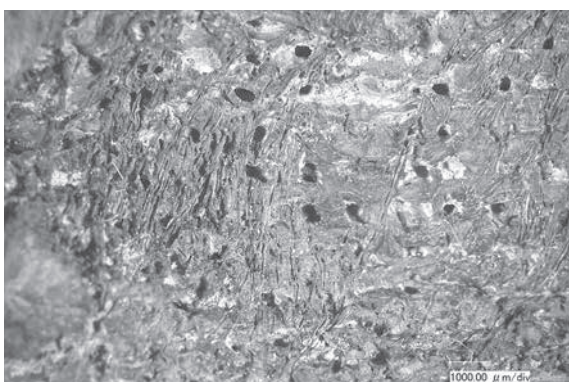


写真14 上狛北遺跡出土漆布裏面細部の状況
(褐色布の繊維構造・実体顕微鏡写真)

の形状の維持を目的とした塗布行為が、古墳時代初期から認められることを勘案すれば、黒漆などである可能性が高い。

一方の裏面に関しては、色調的には表面の漆黒色とはまるで異質の褐色を呈している。織りの密度が不明瞭で、一見、獣皮を思わせる質感を呈していたが、実体顕微鏡観察によると、皮革にみられる毛穴は確認されず、布(繊維)であることが判明した(褐色布)。

しかし、実体顕微鏡下においても、表面の平織り布のような繊維の組織や織りの単位はほとんど認めることができなかった(写真13・14)。

このように、2枚の織の組織が異なる布(織物)を合体させて繊維状の製品を形成していることが判明した。

なお、裏面側において、布の端(反物の端)を縫合した痕跡が明瞭に残る資料が散見された。

縫合部分は、布の重ね代部分の厚みが増す位置で、それが表側の黒色布を押し上げ、あたかも、黒色布と褐色布をはり合わせたもの同志を縫合したかのようにみえる(写真2)。

しかし、この部分を詳細に観察すると、表面の黒色布について、その背面の縫合位置で、織り単位の乱れが全く認められず、縫合の縫い糸は裏面の褐色布のみを貫き、経緯が明瞭な黒色布を全く貫いていないことから、褐色布を縫い合わせることを目的に縫合が実施されていることが判明した。

縫合位置の表裏不一致という観察所見は、表面の黒色布と、裏面側の褐色布が、別の布状製品として製作されたことを意味する。裏面側の褐色布については、布の大きさを調整する目的で、反物の端部において、さらに縫製により布材の拡張を実施したものを利用していることが判明した。



写真15 上狛北遺跡出土漆布褐色布にみられる縫合痕跡1

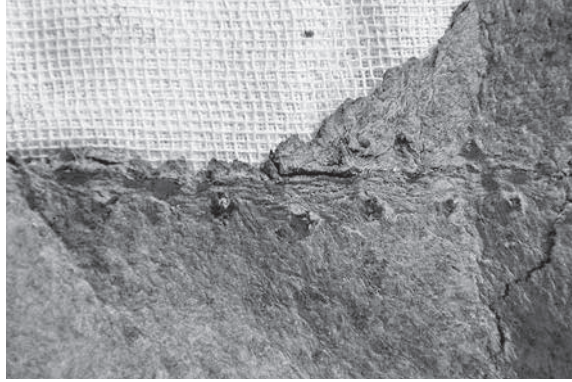


写真16 上狛北遺跡出土漆布褐色布にみられる縫合痕跡2

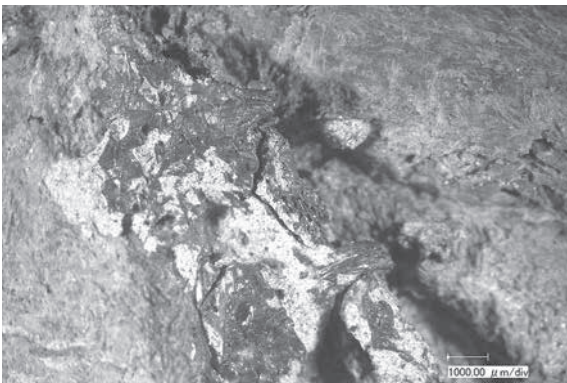


写真17 上狛北遺跡出土漆布表面細部の状況
(経緯がやや斜行する部位・実体顕微鏡写真)

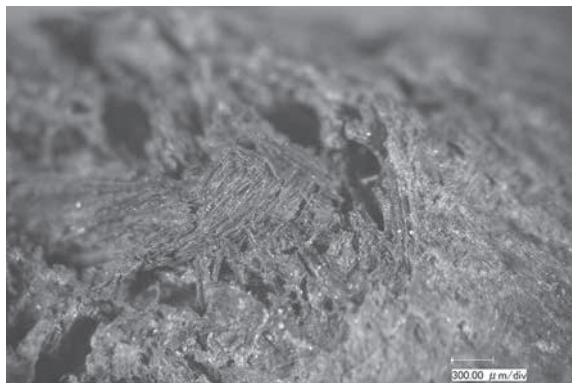


写真18 上狛北遺跡出土漆布裏面細部の状況
(糸の撚り単位・実体顕微鏡写真)

素材と製造工程が異なる布を2枚重ねて構成された布製品について、断面部分を拡大観察したところ、2層の布の間には、側面形状が異なる布繊維が観察された。ただし、繊維の方向は一定ではなく、粗い布状を呈することがわずかに認められた(写真19・20)。

(2)織りの単位の粗い漆布 抽出した繊維状製品のなかには、分析委託していないが、上記で紹介した所見を示す個体とは、表側の繊維素材が異質のものを、少量ながら確認した(写真21・22)。

表側の黒色布に相当する布の織りの単位が非常に粗く、緯糸を1本ずつ取った上で、強捻糸を絡ませて織り上げられた織り組織を成し、それに黒漆掛けしたものに、獣皮状の布を合成したもののようである。

経緯の単位が非常に粗いため、一見「編物」に見えるが、拵織で織られた薄絹とみられ、文献に見える「紗」に相当する織物かも知れない。

これとよく似た繊維を用いて製作された製品として、上狛北遺跡から南に約3.5kmの地点にある西山遺跡において検出された平安時代初頭の棺槨構造を示す木炭槨墓(西山古墓)の木棺内に副葬された「漆紗冠」を例示することができる(写真23～26)。

西山古墓出土例を仔細に観察すると、冠帽上部に作られた鬘を納める巾子部分が遺存しており、「三山」の形状を示す頭頂部に「漆布」によく似た素材が使用されていることがわかる。とくに、巾子本体は、粗い織りの布と緻密な組織の布を2枚合わせた構造を示し、頂部は緻密な布を剥ぎ



写真19 上狛北遺跡出土漆布側面の細部1
(実体顕微鏡写真)

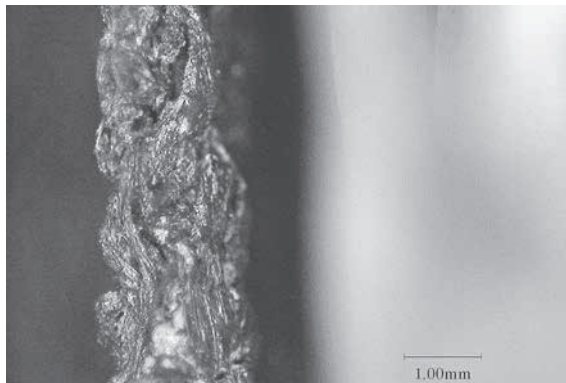


写真20 上狛北遺跡出土漆布側面の細部2
(実体顕微鏡写真)

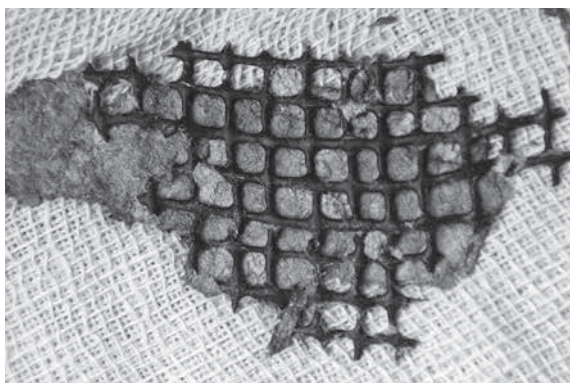


写真21 上狛北遺跡出土粗い織りの黒色布(表面)

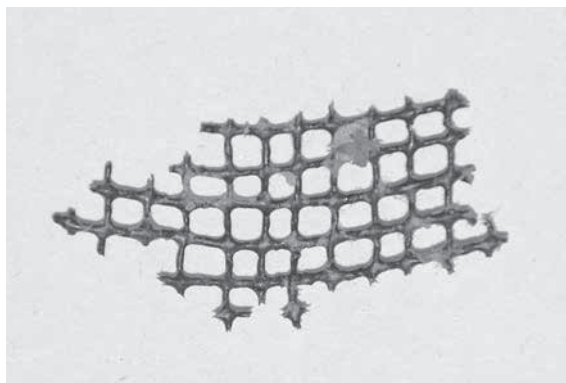


写真22 上狛北遺跡出土粗い織りの黒色布(裏面)

取った通気性の良い布に置き換えている。

写真23の拡大写真によれば、巾子頂部の漆布の使用方法は、粗い目の布を内側に、織の単位がほとんど読み取れない緻密な布(皮革)を外側にした繊維を使って、その素材としている。

一方、巾子の基部に近い部位の構造は、写真24・25に示す通り、上記2枚合わせの繊維製品の冠の内側にさらに緻密な繊維単位の布をもう1枚張り合わせて、3枚構造としている様子が確認できる。とりわけ、一番内側に貼られた繊維は、背後の平織布の格子目組織が写し取るような組織単位が確認されるが、これとは別に一定方向の細かい条痕(写真では横方向)が緻密に観察できる。こうした組織は、上狛北遺跡出土の漆布には認められない所見である。

ここでいうところの「漆紗冠」とは古代文献に用いられる用字で、別に「漆冠」とも記し、「うるしぬりうすはたのかうぶり」と訓じる。

『日本書紀』天武十一年三月条に見える「・・・男夫始めて髪結ぐ。仍りて漆紗冠を着る」の記事が文献初出である。

「紗」とは、薄物(うすもの)ではあるが、搦め方は「羅」よりもさらに粗い布(編物)で、経糸を絡み合わせた間に緯糸を通すように織った平織の織物と考えられている。古墳時代前期にすでにその存在は確認できるが、国産化されたのは飛鳥時代と推測される。

『儀式』の礼服の制には、「漆冠」とも表記され、養老衣服令諸臣条によると五位以上の貴族にのみ規定される「礼服冠」と考えられる。



写真23 西山古墓出土漆紗冠巾子全体

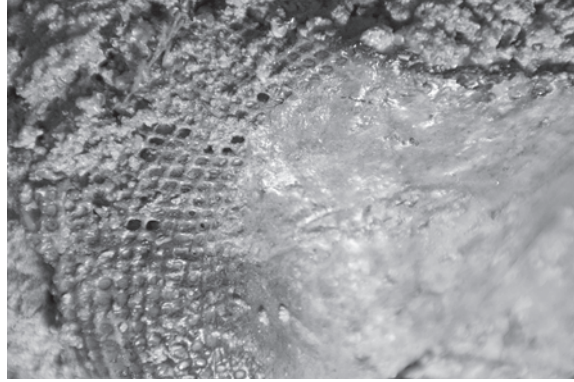


写真24 西山古墓出土漆紗冠頂部外面の素材の変化

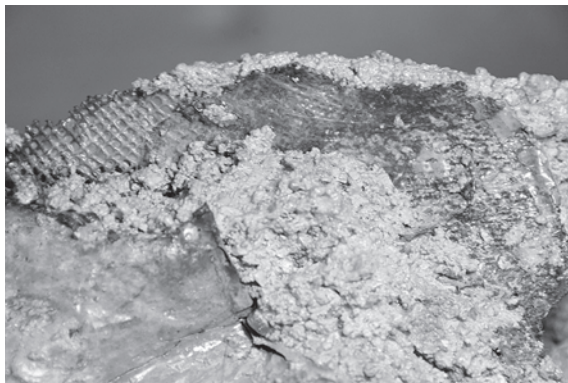


写真25 西山古墓出土漆紗冠頂部内面の素材の変化

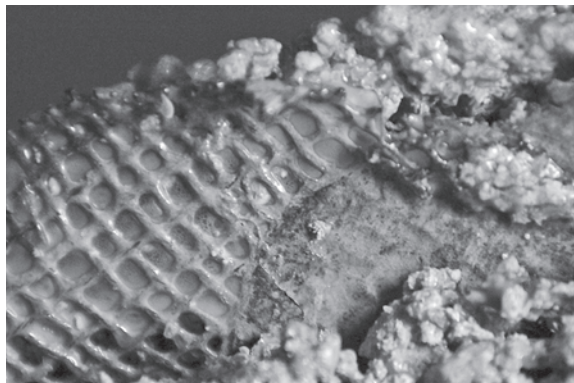


写真26 西山古墓出土漆紗冠の素材変化の拡大

この漆紗冠と推定される資料については、聖武天皇が即位の際に用いたと伝える正倉院宝物「礼服御冠残欠」を始め、平城京左京八条三坊や東二坊坊間小路西側溝出土例が冠の全体形がわかる事例として著名である。

このほか、太宰府政庁に出仕した官人の墓として知られ、国内で唯一「売地券」が出土した福岡県宮ノ本遺跡の2号火葬墓からも、その断片(写真27)が出土しており、被葬者像との比較検討ができる資料である。また、近年長岡京跡左京六条一坊十三町(長岡京跡左京第557次)調査では、良好な遺存状態で検出され注目を集めたのは記憶に新しい(写真28)。

これらの実物事例が、文献にみえる「漆紗冠」と同じものだとすれば、漆紗冠は、上狛北遺跡で出土したような「漆布」を構造素材として製作された代表的な製品の実例といえる。

ただし、上狛北遺跡で出土した「漆布」は、漆紗冠のように立体に組まれた製品ではなく、布自体が生地＝反物(たんもの)状をなし、製品として組み上げられる前段階の材料と把握してよいものと考えられる。

讃岐国の郡領名が記された木簡(第1図右)や、出土環境の項目で述べたように、「漆布」が出土した土坑の共伴資料に、荷札とみられる木簡が含まれる点はこれを理解するうえで一つのヒントを与えてくれる。

解釈のひとつとして、中央(都)に貢進された特殊な繊維素材である可能性が指摘できる。

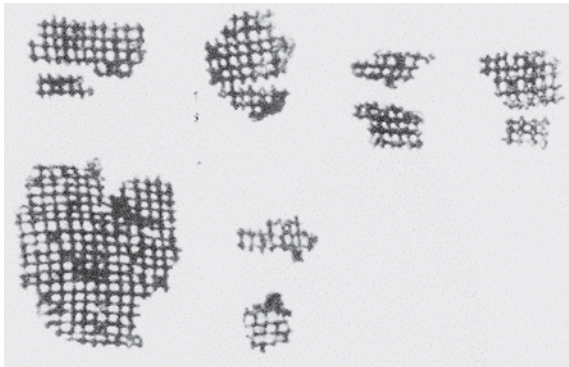


写真27 宮ノ本遺跡の2号火葬墓出土漆紗冠断片
太宰府町教育委員会
「宮ノ本遺跡 太宰府町の文化財 第3集」から転載

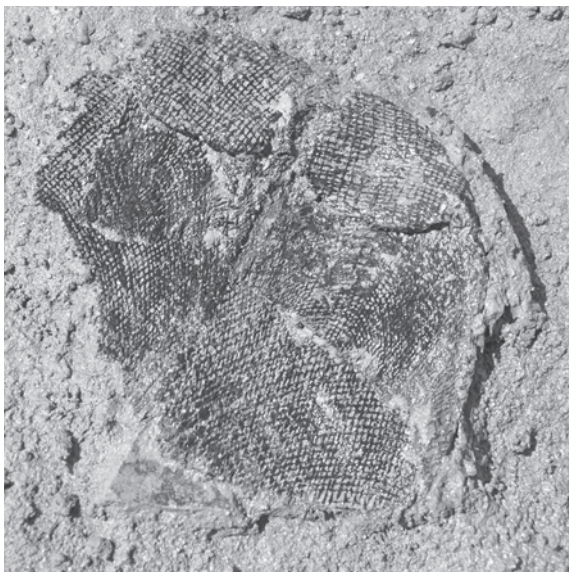


写真28 長岡京左京六条一坊十三町出土漆紗冠
(公財)長岡京市埋蔵文化財センター「長岡京市埋蔵
文化財センター年報 平成24年度」から転載

4. まとめ

京都府木津川市に所在する上狛北遺跡の調査で出土した漆が塗布された繊維状製品について、その細部の構造的な特徴を解明することを目的に、類例資料も参考にしつつ、検討を加えた。

その結果、上狛北遺跡出土の「漆布」は、二種類の織の構造・紡織単位の異なる布を合わせて厚手の布生地状に製作されたものであることが判明した。

さらに、こうした繊維状布を素材として用い、古代における文献にみえる礼式に規定された「漆紗冠」に比定されている遺物の素材との類似性を確認することができた。

漆により表面がコーティングされたことにより、土中出土資料とはいえ、繊維製品としては、その組織を知ることができる稀有な遺存状況を示していた。

サンプルの包埋処理による断面観察などを実施し、製造の工程や塗料の材質同定を加える必要は残されたが、古代における繊維製品の実像を検討するうえで貴重な成果を得ることができたと考える。

(まつお・ふみこ＝京都府立山城郷土資料館資料課主査)

(いが・たかひろ＝当調査研究センター調査課企画調整係主査)

謝辞

本稿を執筆するにあたり、分析を依頼した(公財)元興寺文化財研究所の特任研究員小村真理氏、山田卓司氏には分析結果の報告のみならず、古代の繊維製品に関する研究動向等について多大な教示を受けた。ここに記して謝意を表します。

参考文献(当調査研究センター刊行報告書)

上狛北遺跡：筒井崇史・松尾史子「上狛北遺跡第2次発掘調査報告」

(『京都府遺跡調査報告集』第150冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2012

西山塚古墳：伊賀高弘「(2)西山塚古墳とその周辺地区 木津地区所在遺跡平成3年度発掘調査概要」

(『京都府遺跡調査概要』第51冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992

びょうどういんきゅうけいだい
12. 平等院旧境内遺跡

所在地 宇治市宇治塔川

調査期間 平成26年12月16日～平成27年3月10日

調査面積 1,600㎡

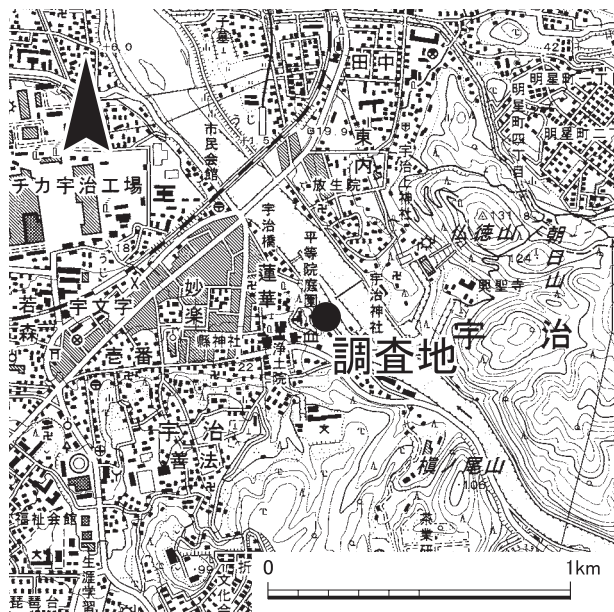
はじめに 今回の調査は、塔の島地区改修事業に伴い、国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所の依頼を受けて実施した。調査地は、平等院の東側に隣接しており、宇治川の分流である塔の川の川底にあたる。平成24年度から調査を行っており、今回で3回目の調査となる。これまでの調査で、川底を急激な水流から保護するために打たれた杭群や、木杭と河川礫で構築された堤状遺構を検出した。堤状遺構の木杭の放射性炭素年代測定を行ったところ、15世紀(室町時代)の年代を示すものがあった。

調査の概要 調査地は、塔の川に架かる喜撰橋と橘橋の間の川底である。今年度は、平面的に堤状遺構の全容を調査するとともに、これまで調査していなかったその下流側に調査区を設けて、遺構の有無を確認した。下流側には、平等院釣殿があったと想定されており、昭和48(1973)年の災害復旧工事中に川中から釣殿のものと推定される柱1本が見つかった。

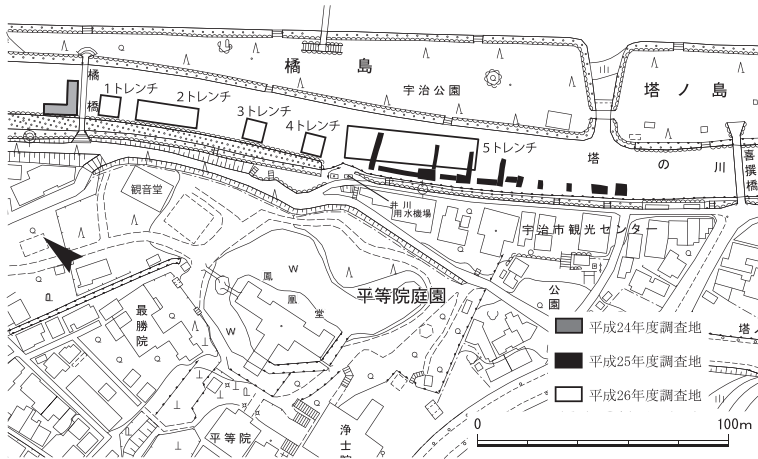
1・3・4トレンチ 現在の川底から深さ約1mにわたって現代の河川堆積砂礫層があり、その下に昭和40年代に設置されたコンクリートの川床およびその整地層があった。その下層に、近世の遺物を含む河川堆積した砂礫を確認した。遺構は認められなかった。

2トレンチ 1・3トレンチの間に設定したトレンチである。平安時代に平等院本堂があった地点とされる現観音堂の東側に位置する。文献により、本堂から宇治川に向かって翼廊が延び、その先端に宇治川に張り出して釣殿があったと想定されており、その想定地付近にあたる。

このトレンチでは、1トレンチなどと同様、コンクリートの川床およびそれに伴う整地土が認められた。それを除去すると地上に細砂が堆積しており、その中から平等院関係の瓦や中世の土師器皿片などが出土した。遺構は認められなかった。



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 宇治)



第2図 トレンチ配置図

緩やかな円弧をなしている。内部からは磨滅を受けた瓦片のほか、近世の陶磁器片や明治時代の十銭銅貨などが出土しているので、近世以降まで使われた可能性がある。

まとめ 5トレンチで確認した堤状遺構についてはその性格は特定できないが、塔の川の左岸近くにあることから、水流を制御する防災施設として造られた可能性がある。『宇治市史』によ



写真1 2トレンチと平等院観音堂(北東から)



写真2 5トレンチ堤状遺構全景(北西から)

5トレンチ 昨年度確認した堤状遺構の詳細を明らかにするために、広範囲の調査区を設定した。調査の結果、堤状遺構は南北53m×東西5mの範囲に、木杭を打ち人頭大の石を落とし込んで構築されていることが判明した。部分的に丸太材が埋められている。

平面的には、左岸側に向かい

ると、平等院から宇治橋にかけては宇治川の増水で水害が頻発したため、江戸時代に堤が設けられたとされる。安永5(1776)年の史料では、堤は「前々よりの仕来り」とあり、それ以前から堤が造られていたと考えられる。また、平等院から宇治橋にかけては、宇治浜・平等院浜と呼ばれ、近世末・明治初頭には舟問屋や舟宿があった。堤状遺構は、宇治川の急な水の流れから船着場や川岸を護るために水流を弱める施設として造られたとも考えられる。また、船溜り状の施設とも考えられる。いずれにしても、かつての宇治川の景観を復元する手掛かりとなる遺構と言えよう。

2トレンチでは平等院関係の瓦が出土した。瓦には水流によって磨滅した痕跡がなく、遠隔地から流下したものとはみられない。付近に何らかの平等院関係の建物があった可能性も考えられる。また、これまでの平等院の修理等で不要になった瓦を投棄したものともみることができよう。

(引原茂治)

しもみずし
13. 下水主遺跡第 6 次 (D 3 地区) ・
みぬしじんじゃひがし
水主神社東遺跡第 6 次 (B 4 地区)

所在地 城陽市寺田金尾

調査期間 平成26年11月5日～平成27年2月26日

調査面積 2,640㎡(下水主遺跡D3地区：2,050㎡、水主神社東遺跡B4地区：590㎡)

はじめに この調査は、新名神高速道路整備事業に伴い、西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施した平成26年度調査のうち、年度後半に調査を実施した下水主遺跡第6次調査D3地区と水主神社東遺跡第6次調査B4地区の2か所の調査成果について報告するものである。

下水主遺跡・水主神社東遺跡は、城陽市西部に位置し、木津川右岸の微高地とその後背湿地に立地している。両遺跡ともこれまでの発掘調査の成果から縄文時代から近世に至る複合遺跡であることが明らかになっている。

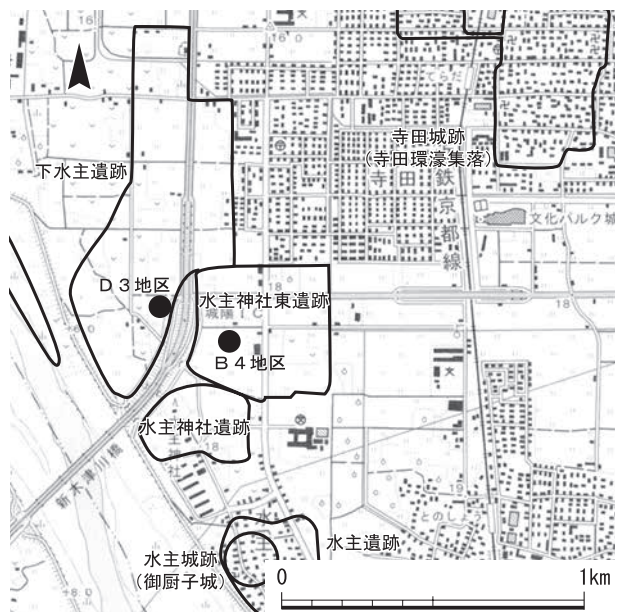
調査概要 今回報告する2地点では、調査の結果、中世に形成された島畑を確認するとともに、縄文時代から古代にかけての遺構・遺物を検出した。

①下水主遺跡D3地区 調査の結果、古墳時代の溝1条、古代の溝1条、中世の島畑6基を検出した。

古墳時代の溝SD40は島畑の造成によって大きく削平されているが、調査地の東辺から北辺に向かって緩やかに弧状を描く。溝底は、東方から北西に向かって低くなる。検出長約40m、幅7.5m前後、深さ0.3～1.0mを測る。SD40の北端部でややまとまって弥生土器や土師器などが出土した。

古代の遺構として、後述する島畑87の上面で、溝SD42を検出した。SD42は検出長6.2m、幅1.2m、深さ0.35mを測る。溝底で土師器甕が出土した。

中世の遺構として島畑を6基検出した(島畑83～88)。最も西に位置する島畑83は南北方向に主軸を持ち、東側に位置する島畑84～88は東西方向に主軸を持つ。両者の間の溝を境に島畑の配置が変わっており、条里地割りの境界に該当すると考えられる。島畑83は検出長34m、幅9mを測り、島畑の上面で多数の耕作溝を検出した。また、島畑84～88は検出長7～19m、幅5～8mを



調査地位置図 (国土地理院 1/25,000 宇治)

測るが、大半は調査区外にのびる。

②水主神社東遺跡B4地区 調査の結果、中世の島畑2基、弥生時代の溝1条を検出したほか、縄文土器が出土する谷状地形を確認した。

縄文時代に属するものとしては、調査区の最下層で北東から南西に延びる浅い谷状地形を検出した。この谷状地形は自然地形と推定され、その北肩で縄文時代晩期の土器片が多数出土した。これらは遺構に伴うものではなく、谷状地形の傾斜面に堆積した遺物と推定される。

弥生時代の遺構として、後述する島畑89の下層で溝SD4を検出した。検出長4.2m、幅0.65m、深さ0.05mを測り、埋土から弥生土器の小破片が出土した。

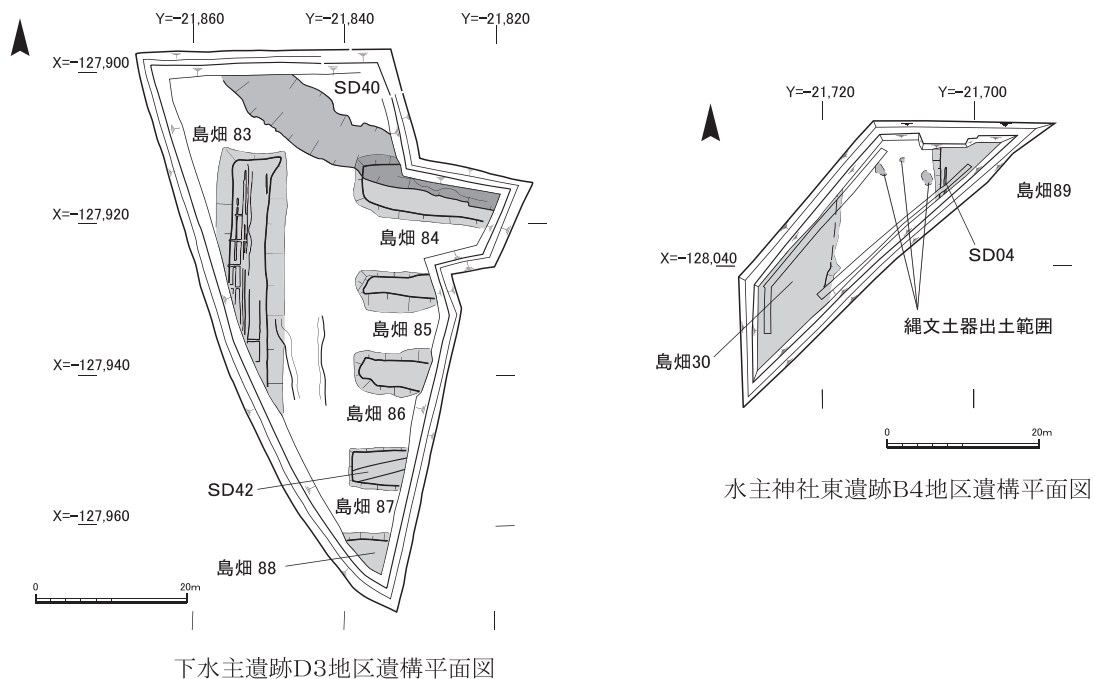
中世の遺構として、島畑2基を検出した(島畑30・89)。このうち島畑30は平成25年度のB3地区の調査で検出した島畑と同一の島畑と推定される。いずれも島畑の一部を検出したにとどまり、検出長5.5~10m、幅8m以上、高さ0.6~0.8mを測る。

まとめ 今回報告した2地点の調査成果は以下のようにまとめることができる。

①縄文時代晩期の土器片は、今回報告した水主神社東遺跡B4地区とその周辺の調査区でも出土していることから、調査地周辺に広く縄文時代晩期の活動領域があったと推定される。

②古墳時代の遺構として、下水主遺跡D3地区で溝SD40を検出した。同時期の遺構としては、B地区で大規模な溝SD22を、J地区で溝SD4を検出している。調査地周辺に古墳時代前期の溝群が広がるものの、竪穴建物など、集落の存在を示すような遺構は未検出で、関連する集落については今後の検討課題である。

③これまでの調査と同様に中世以降の島畑を検出した。現在、90基近い島畑を検出しており、すでに指摘しているところであるが、これら島畑の配置状況は現代の水田の区画に踏襲されていることを確認することができた。(筒井崇史)

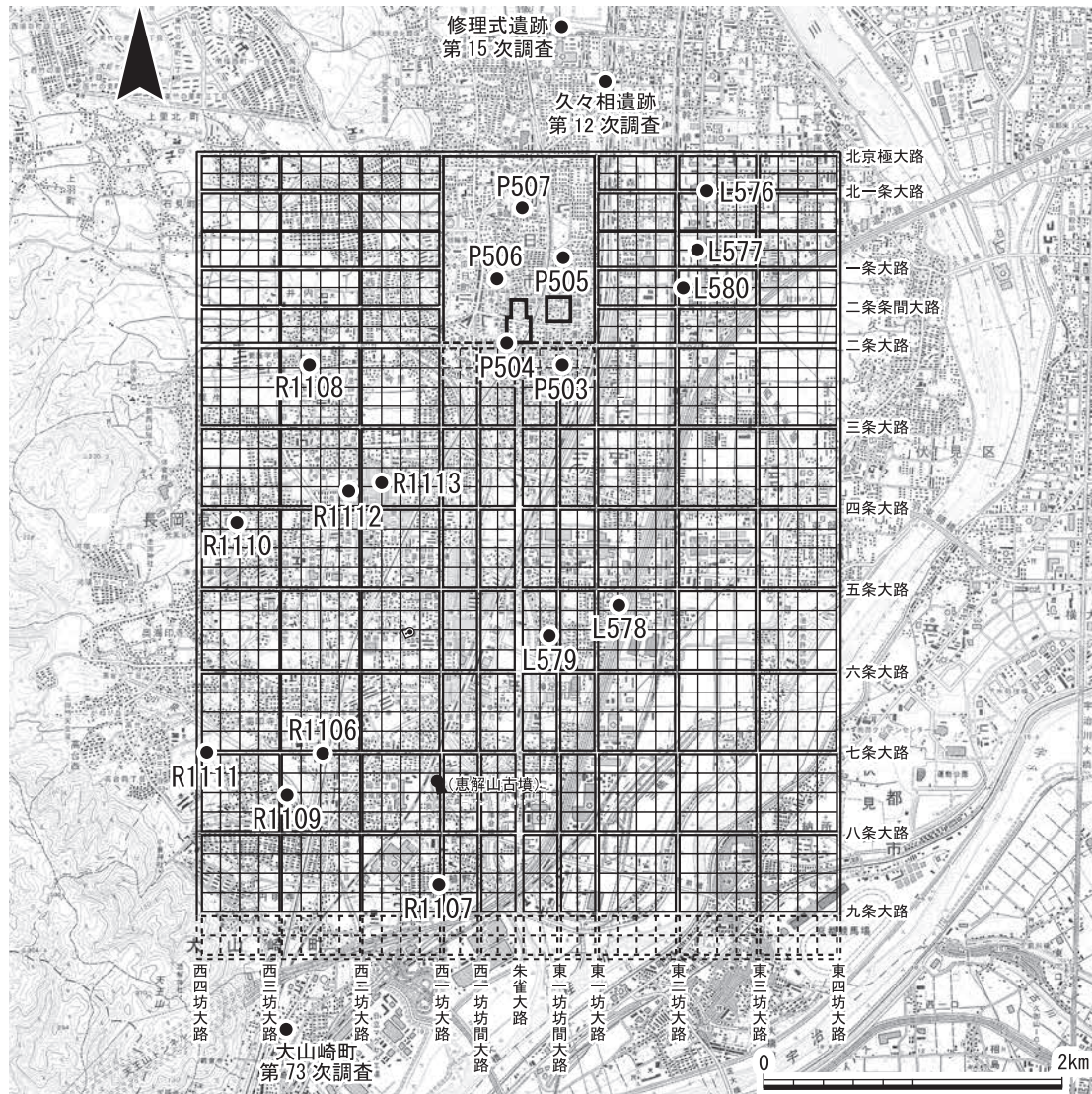


第2図 遺構平面図(1/1,000)

長岡京跡調査だより・123

長岡京跡発掘調査の情報交換および資料の共有化を図り、長岡京跡の統一的な研究に寄与することを目的として、毎月1回、長岡京域で発掘調査に携わる機関が集まり、長岡京連絡協議会を実施している。平成26年3月から6月の例会では、宮域5件、左京域5件、右京域8件、京域外3件の合計21件の調査報告があった。その中で、主要な事例について報告する。

宮域 宮跡第504次調査(向日市上植野町)では、朝堂院の南に面する地点で調査が行われたが、開析谷を人工的に埋めて造成した整地層が厚く堆積する状況が認められた。整地土上面は削平され当該期の遺構は残されていなかった。内裏想定地の北に隣接する宮跡第505次(向日市森本町)では、長岡京期の条坊側溝とそれに面する内溝が確認され、宮域の北側における条坊街区のあり



調査地位置図 (1/50,000)

(向日市文化財事務所・(公財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図を基に作図)

調査地はPが宮域、Rが右京域、Lが左京域を示し、数字は次数を示す。

方を検討する上で重要な成果が得られた。検出された溝は、座標上では東一坊大路に係る遺構で、その東側溝と宅地内内溝と考えられる。側溝内部は炭を多量に含む土で埋められ、供膳形態を主体とする多量の土器が出土した。この他、弥生時代の土器が出土する「L」字溝が確認されたが、周辺の調査状況と照合すると方形周溝墓の可能性が高いことが指摘された。宮跡第506次(向日市寺戸町)では長岡京期と考えられる土坑が数基検出され、軒丸瓦片が出土した。

左京域 左京第577次調査(向日市森本町)では、一条条間南小路の南北両側溝(幅員約24m)と、これに交差する東三坊坊間西小路の東側溝が検出された。前者の南側溝は、合流部分で幅1mを超えて大きく広がり、流れを伴う堆積層で埋まっていた。また、柱間寸法3.7m等間で並ぶ柵が1条確認された。左京第578次調査(長岡京市神足)では、条坊に関わる情報は未確認ながら、長岡京期遺物包含層の下位で縄文土器(後期～晩期)約20点が出土する落ち込み状遺構が検出された。左京第579次調査(長岡京市)では、中世前期の溝と礎板をもつ柱穴、弥生時代の土坑が検出された。調査地の小字名「屋敷」は、乙訓地域でもほかにいくつか残されている。考古学的な調査で中世の屋敷関連の遺構が検出される事例があり、この調査もそれを傍証する成果と考えられる。左京第580次調査(向日市鶏冠井町)では、二条条間北小路の南側溝が検出され、墨書土器が出土した。

右京域 友岡遺跡と重複する右京第1106次調査(長岡京市友岡)では、中世と推定される多数の円形掘形の柱穴や井戸と、これに先行する掘立柱建物が検出された。後者は長岡京期と想定された。右京第1108次調査(長岡京市今里)では、長岡京期と古墳時代後期の遺構が検出された。古代では土坑や長岡京期の土器が多数出土した柱穴、横断面が袋状を呈し、平瓦が出土した窪み状遺構などが確認された。古墳時代では3基の竈をもつ堅穴建物が検出され須恵器が出土した。右京第1110次調査(長岡京市長法寺)は弥生時代の環濠集落として知られた長法寺遺跡と重なる地点の調査で、平面が円形を呈する堅穴建物の周壁が確認された。床面から細頸壺などの土器が出土し、弥生時代後期と考えられる。律令祭祀遺物が多く出土した西山田遺跡の南の丘陵部に位置する右京第1111次調査(長岡京市下海印寺)では、土器や頭部を欠いた土馬が出土した。右京第1112次調査(長岡京市長岡)では、近年まで清水焼の工房が営まれていたことを示す「陶器町」の地名が遺称され、小型の人物陶や碇子、窯道具などが多量に出土した。また、掘形の一辺が1.0～1.4m、柱痕跡の直径が40cmと、乙訓地域では最大規模の掘立柱が、東西3間、南北6間分確認された。側柱列の内部で柱筋が通らない柱穴があり、棟持柱の可能性もある。掘形内出土の須恵器はTK209型式に限定され、建物整地層中の遺物もこれを下限とすることから6世紀末～7世紀初頭に造営された居館と考察された。右京第1113次調査(長岡京市長岡)では、弥生・古墳時代の包含層に掘り込まれた近世の座棺形式の墓とみられる円形土壇が群在していた。

京域外 修理式遺跡第15次調査(向日市寺戸町)では、弥生時代～古墳時代の溝・落ち込みと、奈良～平安時代の溝・柱穴などが検出された。後者の中には、幅1.1～1.3m、深さ0.6mの箱状断面を呈し、隣接する第12次調査で検出された東西溝を北側溝とする道路が想定された。

(伊賀高弘)

普及啓発事業（平成27年3月～6月）

当調査研究センターでは、埋蔵文化財発掘調査の成果を広く府民の皆様へ報告し、地域の歴史を理解していただくため、埋蔵文化財セミナーや小さな展示会をはじめ、「関西考古学の日」関連事業、向日市まつりへの参加等の普及啓発活動を行っています。

現地説明会

5月30日（土）に寺町通と荒神口通に面し、京都御所の東に位置する京都府立鴨沂高校において、寺町旧域・法成寺跡の現地説明会を実施しました。

今回の調査地は、昨年度から引き続き調査が行われました。伝統ある高校の敷地内ということもあり、5月らしからぬ暑さの中、287名の方々が調査担当者の説明に熱心に耳をかたむけられました。

調査担当者の説明の後は、図書館の横から西側に広がるトレンチを現地説明会資料と見比べながら、遺構をのぞき込んだり、遺物の出土状況を観察して、ゆっくり歩いてまわっておられました。

また、現地説明会資料の中に「宝永の大火で焼失」という内容を見て、「なぜ、火事があったのか分かるのですか？」→「焼土が検出されているからです」、「何という名前の寺があったのですか？」→「洛中絵図などから常念寺か専念寺の跡と考えられます」など、職員と熱のこもった質疑応答が繰り広げられていました。

遺物を展示しているコーナーでも「いつの時代のものですか？」「何に使用していたものですか？」「陶磁器の産地は？」など質問があり、興味深く観察しておられました。

今回の現地説明会は、寺町形成期の寺院の土地利用のあり方や安



寺町旧域・法成寺跡現地説明会



寺町旧域・法成寺跡現地説明会

土桃山時代から近世初頭の墓制の実態がわかる貴重な調査事例となりました。

また、昨年度は鴨沂高校1年生を対象に発掘・測量・土器の洗浄・旧校舎探検などの体験を通して、校地の歴史を感じたり、埋蔵文化財の調査の流れを学んでいただくことができました。今年度は、同日午後から鴨沂高校の関係者を対象に説明会を行いました。学校長をはじめ教職員14名、生徒50名の方々が参加されました。積極的に質問ができるなど、母校が設立される以前の歴史に興味を持っていただけました。

出前授業

5月11日（月）京都市立修学院小学校にて、6年生109名の児童を対象とした出前授業を行いました。

社会科歴史学習の一環として、地域の歴史についての理解をすすめることを目的として、当調査研究センター小池寛参事を講師に講義を実施しました。

事前に学校側と打ち合わせを行い、社会科の授業の進捗状況に合わせて大きな3つのポイントを設定し講義を進めました。



修学院小学校 体育館での出前授業



修学院小学校 出前授業風景

まず修学院学区のなかにある遺跡や寺院を通して、自分たちが住む地域の歴史を学ぶこと。そして、縄文人の平均的寿命が概ね30歳であり、「いのち」の誕生である「出産」と「いのち」の終焉である「死」を家族全員がその時を共に過ごし、喜びと悲しみを共有したこと。最後にお米づくりが始まった弥生時代に大陸から「戦い」が始まったことと、古墳時代の前方後円墳がある一人のために造られたお墓ではなく、極めて政治的な意味をもっていたことの3点です。

子どもたちにとっては教科書から離れ、授業の進捗に合わせたタイムリーな内容であったため、おしゃべりをする児童もなく、ノートに鉛筆を走らせながら講義に集中している姿が印象的でした。

（岡村美知子）

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究 センター設立35周年記念事業について

小池 寛

1. はじめに

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昭和56(1981)年に業務を開始し、今年度で設立35周年をむかえます。設立当初は、京都市上京区の立命館大学旧広小路学舎内に事務所をおき、総勢25名の職員体制で40遺跡の発掘調査を実施しました。

その後、職員数も平成7(1995)年6月には48名を数え、平成23(2011)年京都府知事から公益財団法人として認可を受け、現在に至っています。本稿は、35周年を簡単に振り返り、35周年記念事業について紹介したいと思います。

2. 『小さな展覧会』から『^{やまところからざえ}和魂漢才—京都「交流」の考古学—』

先に述べましたように京都市上京区の立命館大学旧広小路学舎内の一室におきまして、展示ケースを使用せず、会議テーブルに白布を敷いただけの簡素な展覧会を「小さな展覧会」と銘打って開始しました。当初は、設立されたばかりの時期でもあり、組織の知名度も低く、展覧会を見学に来られる方は僅かでしたが、それでも徐々に身近に遺物を観察することができる展覧会として定着してきました。昭和59(1984)年に現庁舎に移転した際、隣接する向日市文化資料館のご協力をいただき、「小さな展覧会」を実施し、現在も継続しております。「小さな展覧会」の名称は、当センター初代の調査課長であります故堤圭三郎さんによって付けられ、現在も設立時の想いを大切にす意味において踏襲しておりますが、発掘調査成果展であることをより知ってもらえるように工夫検討中です。

さて、当調査研究センターでは、設立の周年事業として以下の展覧会を実施しました。

- ・ 10周年記念展覧会『京都 古代との出会い』
(於：京都文化博物館、平成2年8月8日～同9月2日、入館者数8,119名)
- ・ 20周年記念展覧会『京都 時を旅して』
(於：向日市文化資料館、平成12年10月1日～同10月29日、入館者数2,031名)
- ・ 25周年記念展覧会『そして、「王」になった。—京都・古代国家への道—』
(於：向日市文化資料館、平成17年9月1日～同10月23日、入館者数1,771名)
- ・ 30周年記念展覧会『天平浪漫紀行』
(於：向日市文化資料館、平成22年8月14日～同9月20日、入館者数2,028名)

そして、今年度は35周年記念展覧会として以下の内容で実施する予定です。

- ・ 開催テーマ 『和魂漢才—京都「交流」の考古学—』

- ・会場 京都府京都文化博物館 2F
- ・開催期間 平成27年11月28日(土)から平成28年1月11日(月・成人の日)
- ・展示概要 東アジアのなかの京都、国内における地域間交流を主要なテーマとし、縄文時代から近世における「交流」の歴史を詳らかにします。

3. 埋蔵文化財セミナーと講演会及びシンポジウム

当調査研究センターでは、年度ごとに各地で発掘調査を実施しており、注目される遺跡から得られた調査成果を軸に埋蔵文化財セミナーを継続しています。会場は、固定することなく丹後・丹波・山城の各地で実施しています。セミナーには、当調査研究センター職員の発表とともに開催する市町の文化財保護行政担当者の方々にも発表をお願いし、一件の発掘調査の重要性のみならず、その地域の中でどのような意義があるのかについても、参加者のみなさんにわかりやすく解説しています。

一方、講演会は当初、年に1回、開催していましたが、近年は、5周年毎の事業として開催しています。第2回講演会は『加古川・由良川の道』と題して昭和59(1984)年に故佐原真理事を講師に開催しました。また、景初四年銘鏡が発掘された際は、故福山敏男理事長、都出比呂志理事を講師として開催しました。近年は、節目の周年事業で実施する展覧会と同じテーマでシンポジウム等を開催するようにしています。

今年度は35周年記念事業として、以下のシンポジウムを計画しております。

- ・開催テーマ 『和魂漢才—京都「交流」の考古学—』
- ・会場 向日市民会館ホール
- ・日時 平成27年11月29日(日)
- ・概要 律令期から中世における「交流」を中心に、記念講演、基調報告をもとにシンポジウムを開催します。

4. 埋蔵文化財論集の刊行

当調査研究センターでは、5年ごとの節目に「埋蔵文化財論集」を刊行してきました。

以下に既刊の論集を振り返っておきます。

第1集	創立五周年記念誌	53編	609頁	1987年
第2集	創立十周年記念誌	49編	512頁	1991年
第3集	創立十五周年記念誌	55編	664頁	1996年
第4集	創立二十周年記念誌	52編	558頁	2001年
第5集	創立二十五周年記念誌	33編	410頁	2006年
第6集	創立三十周年記念誌	39編	448頁	2010年

今まで、合計218編、3201頁、高さにして21cmの研究業績が蓄積されています。さて、今年度は、これまでの編集方針を踏襲しつつ、考古学・建築学・文献史学等についての論考を第7集として

刊行する予定にしております。

第7集 創立三十五周年記念誌 『京都「交流」の考古学』

I部 東アジアの中の京都

II部 地域間交流と京都

III部 学際化する文化財研究

5. 記念冊子刊行

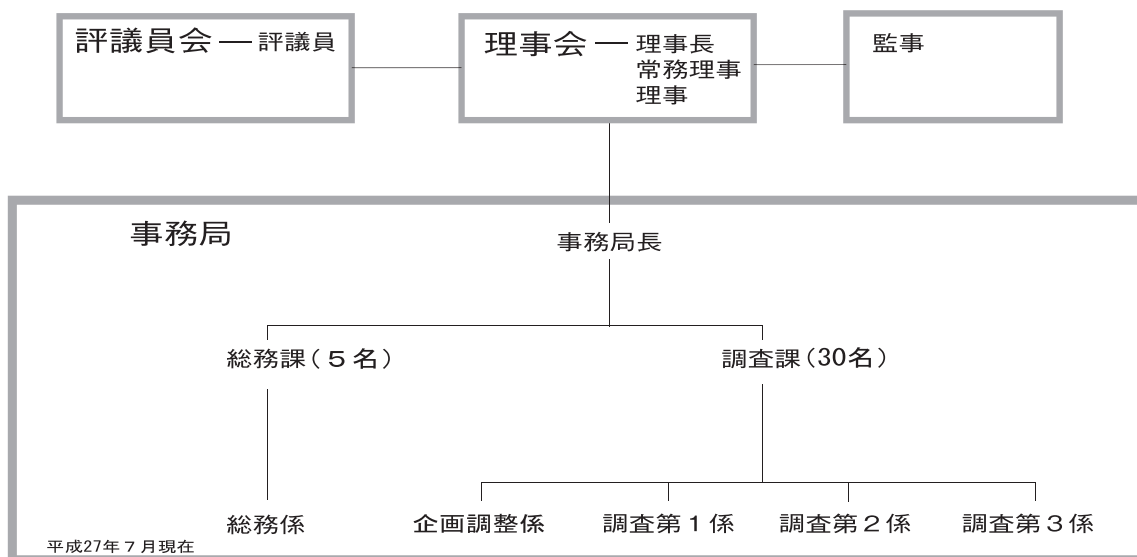
当調査研究センターでは、平成元(1989)年に『謎の鏡 卑弥呼の鏡と景初四年銘鏡』、平成22(2010)年に『天平びとの華と祈り―謎の神雄寺―』、平成23(2011)年に『昔むかし……。～京都府の遺跡をよむ～』を刊行してきましたが、今年度は、35周年記念として当調査研究センターが35年間で蓄積してきた考古資料を厳選し、その歴史性をわかりやすく解説する冊子を作成する予定にしています。

6. おわりに

以上、周年事業を中心に35年を振り返りました。当調査研究センターの設立目的は、定款第3条に「京都府の区域内に存する埋蔵文化財の調査、保存、活用、研究及び普及啓発等に係る事業を行い、文化財の保護を図り、もって地域の文化的向上及び発展に寄与することを目的とする。」とあります。この目的を達成するために、当調査研究センターが発掘調査した遺跡の重要性やおもしろさを一人でも多くの方々に知っていただきたいとの思いがあります。そして、これらの事業を通して、われわれ自身が埋蔵文化財の発掘調査の重要性を再認識する機会にもなっています。

今後とも、精度の高い発掘調査を心掛け、調査成果を一人でも多くの方々に届けられるように、いろいろな行事に積極的に取り組んでいきたいと思っています。

平成 27 年度のセンターの組織



センターの動向

(平成 27 年 3 月～6 月)

月 日	事 項
3 8	職員採用選考試験実施
18	長岡京連絡協議会
20	第14回理事会
31	辞令交付
4 1	辞令交付
	新規採用職員オリエンテーション及び研修(～13日)
22	長岡京連絡協議会
30	職場人権研修
5 8.9	全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会開催(於：京都市、向日市、長岡京市)
27	長岡京連絡協議会
30	寺町旧域・法成寺跡現地説明会(351名)
6 1	監事監査
8	第15回理事会
24	第5回評議員会、第16回理事会(書面)
	長岡京連絡協議会

編集後記

空の青さに幾分秋への気配を感じる頃となりました。平成 27 年度最初の『京都府埋蔵文化財情報』第 127 号が完成いたしましたので、お届けします。

本号では、平成 26 年度の京都府内における埋蔵文化財の調査を振り返るとともに、当調査研究センター職員による共同研究事業の研究報告を掲載いたしました。

さらに今年、当調査研究センターは設立 35 周年を迎え、記念講演会・シンポジウム、展覧会の開催を計画しております。開催にあたっては、京都府教育委員会はじめ関係機関と協力して準備を進めておりますので、当事業にご期待願います。

ご一読いただければ幸いです。

(編集担当 岡村美知子)

京都府埋蔵文化財情報 第127号

平成 27 年 8 月 31 日

発行 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒 617-0002 向日市寺戸町南垣内 40 番の 3

Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 河北印刷株式会社

〒 601-8461 京都市南区唐橋門脇町 28

Tel (075)691-5121(代) Fax (075)671-8236



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER